

2025 年度 活動報告書

盛年力! を活かし未来へつなぐ 地域の価値づくり

研究活動成果・地域発展策の提案

1. 楽しい里山づくり (1)
2. 山の辺の柳灯会と大和茶の魅力開発 (5)
3. 「防災・減災」活動を通じた地域づくり (9)
4. 高齢者支援活動のネットワーク構築 (11)
5. 矢田地区の発展に向けて (15)
6. 故郷を未来に残すー明日の山添村 (19)
7. 黒滝村ー魅力の発見と発信 (23)
8. 地域 P&C養成塾生中間発表 (26)

トークセッション「青年と盛年 地域づくりを語る」(29)

2026 年 1 月

奈良フェニックス大学 地域研究科
一般社団法人地域づくり支援機構 地域 P&C 養成塾

ごあいさつ

皆さまにはご健勝にてお過ごしのことと存じ上げます。

平素から奈良フェニックス大学にご支援・ご協力を賜り、ありがたく存じております。

奈良フェニックス大学は、毎年、一般社団法人地域づくり支援機構の共催を得て「地域づくりシンポジウム」を開催してきました。毎回、多くの方々のご参加をいただいております。

今年も、地域づくりシンポジウムを開催いたします。奈良フェニックス大学地域研究科生のプロジェクトの報告・提案、一般社団法人地域づくり支援機構プランナー・コーディネータ養成塾生の活動中間報告を収録した報告書を作成しました。それぞれ優れた活動成果を挙げており、ご支援・ご協力をくださった方々、関わったメンバーに感謝いたします。

なお、奈良フェニックス大学の運営には、奈良県、奈良県市長会、奈良県町村会、大和郡山市、奈良県社会福祉協議会、一般社団法人地域づくり支援機構から後援名義をいただいております、お礼を申し上げます。

奈良フェニックス大学 学長 村田武一郎

皆さまにはご健勝にお過ごしのことと存じます。

日ごろは奈良フェニックス大学に格別のご支援・ご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。

最近の国内及びグローバル社会の情勢は日々大きく変化しております。その影響もいろいろな形で受けざるを得ない状況下にあります。そんな中で、各地域の活性化や成長に向けた地域の価値づくりはいっそう重要な課題となっております。私たち奈良フェニックス大学地域研究科は、いろいろな活動を通じて、地域に貢献できる人材を目指しています。

今年度は、「盛年力！を活かし未来へつなぐ 地域の価値づくり」をテーマとして、12回目となる地域づくりシンポジウムを開催することとなりました。テーマ決定にあたっては、私たちが奈良フェニックス大学創設の目的を再確認するとともに、「地域の価値」という概念について様々な角度から考察しました。また各プロジェクトが目指す「地域の価値づくり」を推進のため、キャッチコピーや、目標値を設定したり、その進捗状況を確認する指標づくりにもチャレンジしているところです。

本シンポジウムでは、奈良フェニックス大学地域研究科生が「特定地域の活性化」と「特定分野の課題解決」の視点から8プロジェクトの研究活動成果や地域発展策を発表いたします。また、共催の一般社団法人地域づくり支援機構プランナー・コーディネータ養成塾生の中間研究活動発表が行われます。

各プロジェクトの研究活動の内容・成果等を報告書としてとりまとめましたので、ご一読賜れば幸甚です。

奈良フェニックス大学地域研究科「第12回地域づくりシンポジウム」実行委員長 猪岡義昭

奈良フェニックス大学

無尽蔵の能力をもつ「盛年たち」が、これからのライフスタイルを学び、仲間づくりを行うとともに、地域社会の将来のための活動を行うにあたっての知識やノウハウを得る「おとなの学びとつどい」の場です。2013年度の開設以来、延べ1,600人を超える方々が受講されています。

一般社団法人 地域づくり支援機構

豊富な知識・ノウハウ・人的ネットワークをもつ地域P&C(地域プランナー・コーディネータ)を中心に、奈良県各地域における次世代に引き継ぎ得る地域づくりに貢献することを目的として活動しています。地域P&C養成塾は、2008年以来、134名の地域P&Cの養成・認定を行ってきています。

楽しい里山づくり

シニア・ジュニアたちが助け合いながら、地域のことを知り、楽しい里山をつくる

奈良フェニックス大学地域研究科「里山づくりグループ」

米田千代子 荒木幸一 高岡宏芳 高井靖之 石丸十五子 酒井則子

阪口文和 辻内幸二 副島明美 北條都 竹下米子 飯田彰孝

佐々木恵美子 中井政友 栗田均 猪岡義昭 白畑正江 加納美幸 川原寿子

本プロジェクトの目標

- ①耕作されていない田畑で、野菜・果樹栽培やヒマワリ畑を作ることを通して、地域の方々のつながりを深め、魅力的で住みよいまちづくりを目指します。
- ②郷土の歴史と伝説を調べる活動を通して、地域をもっと知り、その魅力を探ります。

本プロジェクトの活動概要

(1)休耕田を活かす活動

- ①耕作されなくなった田畑で、野菜・果樹栽培をさらに発展させ、子どもたちや地域の方々との交流を深め楽しく活動する。
- ②CO₂吸収効果の高いヒマワリを栽培し、地域の方々とのつながりを深める。

(2)郷土の歴史と伝説を調べる活動

- ①奈良の昔話 矢田寺に伝わる「味噌なめ地蔵」を学ぶ。
- ②奈良の昔話 矢田町に伝わる「主人神社 土ぐも退治」を学び、紙芝居を制作

プロジェクトの成果

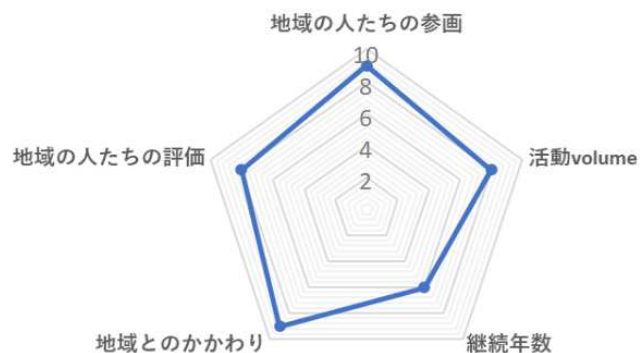
(1)休耕田を活かす活動

- ①地域の方々や、子どもたちとその家族による野菜作りなど、月2回の活動で、延べ130名以上の参加をいただきました。また、収穫したジャガイモを複数の子ども食堂にお届けし、喜んでいただきました。
- ②今年も休耕田をヒマワリ畑にし、ヒマワリを近隣の介護施設にお届けし、喜んでいただきました。

(2)郷土の歴史と伝説を調べる活動

- ①奈良の昔話、矢田寺に伝わる「味噌なめ地蔵」を学び、大学で発表しました。
- ②矢田町に伝わる「主人神社 土ぐも退治」を学び、紙芝居を制作しました。

レーダーチャートによる分析(右図)



1. 休耕田を活かす

(1)耕作されなくなった田畑での野菜・果樹栽培の取り組み

2021年から、耕作されなくなった田畑での野菜・果樹栽培などに取り組んでいます。地域の

農家から数枚の田畑の耕作依頼を受け、使用可能な農機具やその保管場所も借用することができました。果樹を植えられる土地も提供していただきました。耕作依頼や土地提供は、高齢のため農作業を行う体力がないということからです。



一方、これから親子で農業を始めたいという申し入れや、私たちの活動に参加したいという地域の方々の声がありました。

2月23日マルチシートを引きたくさんの方々のご協力でジャガイモの植付けを行いました。植付け後、豚汁と焼き芋を食して楽しみました。

4月に植えたスイカは6月末に獣害で一部被害にあいました。しかしながら、洗濯ネット、カゴを被せる等の対策で被害をなくすことができ、みんなでスイカを食しました。

昨年末に植えたタマネギも豊作でした。2月に植えたジャガイモも今年も豊作でした。取れたジャガイモを6月末、3ヵ所の子ども食堂に寄付しました。ジャガイモ料理をふるまったそうです。

5月に植えたサツマイモは猛暑で心配していましたが、10月から収穫できました。植付け、雑草取り、収穫では、地域の子どもたちやその家族の方々と共同で作業しました。

11月16日 赤い羽根募金活動の一環で、矢田のこども園と共同でサツマイモ掘りを楽しみました。今年も大きなサツマイモがたくさん獲れ、焼き芋にして食べ、子どもたちも大喜びでした。

収穫したサツマイモの一部は、無人販売等を行い、完売することができました。収益は、来年度の種子や種芋代にあてます。



6月に種まきした大豆は11月に収穫。猛暑を乗り越えまずまずの出来でした。一部は枝豆として食べました。脱穀作業をして大豆の味噌をつくる予定です。

このように、この野菜類の植付け、収穫、加工作業を行うことは、私たちの大きな喜びであるとともに、地域の方々・子どもたちとの共同作業が、地域内の「つながりの充実」にも役立っています。そして、私たちは有機肥料・無農薬栽培を行っています。

(2)ヒマワリを種から植えてヒマワリ畑をつくる取り組みとミツバチの巣箱の設置

ヒマワリは、土壌の改善、二酸化炭素の吸収、有機肥料としての活用など、多くの効用がありま

す。効用が多いヒマワリを、私たちは今年も選びました。ヒマワリを植え、地域の方々との交流を深める活動も目指しました。一昨年より近隣の農家の方から休耕田を新たに一反弱(800㎡)をお借りしてヒマワリを種から植え、花を地域の方々に見に来てもらい、交流ができるヒマワリ畑をつくりました。5月上旬にトラクターをお借りして耕しました。ヒマワリの花が7月初めから咲き始め、8月には満開となりました。近隣の介護施設にヒマワリをお届けし、楽しんでいただきました。私たちも、花瓶に生けて楽しみました。



なお、ヒマワリ畑の周りに、ミツバチの巣箱を4つ設置しましたが、昨年と同様、スズメバチに襲われ全滅してしまいました。来年度は、スズメバチ除け網などを設置して対策をする予定です。

(3)果樹園を楽しむ

今年も、ミカン、キウイ、レモン、オニユズも豊作でした。作業の合間に食べたり、持ち帰りジャムなどを作って楽しみました。



(4)お正月に向けて

一寄せ植えを楽しむ

今年も、無人販売所でヒマワリの苗、ジャガイモ、サツマイモを販売しました。12月21日、その売り上げで花苗を購入し寄せ植えにしました。みんな素敵な寄せ植えが完成しました。



寄せ植え完成

楽しく寄せ植え作業中

2. 郷土の歴史と伝説を探る活動

(1)奈良の昔話、矢田寺に伝わる「味噌なめ地蔵」を学びました。矢田寺境内にある石地蔵菩薩像です。お地蔵様の口元に味噌を塗って祈願すると、病気が治るとも言われています。



矢田寺



味噌なめ地蔵

(2)矢田町に伝わる「主人神社 土ぐも退治」を学び、紙芝居を制作しました。

主人神社に伝わる土ぐも退治の伝説は旅の僧と、愛犬(サン)の活躍で、恐ろしい、土ぐもを退治したと伝わる伝説です。

3. 赤い羽根募金

本年度も奈良県ぴーすぺーすプロジェクトに参加しました。私たちの地域づくりの取り組みが認められ、地域活動の解決に取り組む団体として活動資金の支援をいただける

ことになりました。この資金を使い、シニア・ジュニアが活動しやすい環境を整えるとともに、肥料・備品の購入にあてたいと考えています。



主人神社

4. 今年度の振り返りと、今後の活動に向けて

今年度は、地域の方々や、子どもたちとその家族による野菜作りなど、延べ 130 名もの参加をいただきました。また、昨年同様に休耕田を、ケナフに次ぐ CO₂ 吸収量を誇るヒマワリ畑に変えることで CO₂ の吸収効果が得られたと考えます。さらに、郷土の歴史と伝説を探る活動では、2 つのテーマを学び、紙芝居を作成して、学内で発表できたことは大きな成果と考えています。いろいろと反省点はありますが、ほぼ当初の目標を達成できたと思います。

今年度の活動で、シニア・ジュニアとの交流機会を多く催すことができたが、地域の方々と

の交流はまだ増やすことができると考えています。

一方、猛暑による野菜の不作、獣害などについても対策を講じていく必要があります。

来年度は、ヒマワリ畑の充実、ミツバチのスズメバチからの安全対策、野菜・果物の収穫量向上を目指し、子どもたち・地域の方々と

の交流の機会をもっと増やす活動に加え、地域をもっと知る活動にも取り組んでいきたいと考えています。

そして、地域の方々と協力し、楽しみ、つながりを深め、魅力的で住みよい「楽しい里山」になるよう、活動を進化・深化させていきます。

本稿に関するお問合せ先: 栗田均 <henrykurita@gmail.com>

奈良・柳本と大和茶の魅力開発

I 天理・山辺地域のまちづくりを学ぶ

奈良フェニックス大学地域研究科「天理・山辺グループ」

銭谷宥司 島田好彦 高岡宏芳 竹村寛子 白畑正江

荒木幸一 辻内幸二 猪岡義昭 綿田彰 高井靖之

本プロジェクトの目標

本プロジェクトは、天理・山辺地域に着目し、地域の協力を得て、地域研究・実践活動に取り組んでいます。

※天理・柳本地域は、日本最古の道「山の辺の道」が南北に走っており、多くの古墳・神社・仏閣等があり、1998 年、柳本にある黒塚古墳から 33 面もの三角縁神獣鏡が出土し全国的に注目を集めました。柳本町では、三角縁神獣鏡の出土を契機に、まちづくりの機運が高まり、2002 年、有志が「柳本もてなしのまちづくり会」を設立し、柳本町を、住んで良かった町、活気のある町にするための活動が開始されました。2025 年は、「まちづくり会」結成 23 周年となりました。

本プロジェクトの活動概要

①初秋の宵あまたのあかりに浮かぶファンタジーの世界(9 月 13 日・14 日)へ参加

②柳本もてなしのまちづくり会の“柳灯会準備作業”へ参加

本プロジェクトの成果ー柳本もてなしのまちづくり会との協働

①第 22 回『山の辺のあかり 柳灯会』

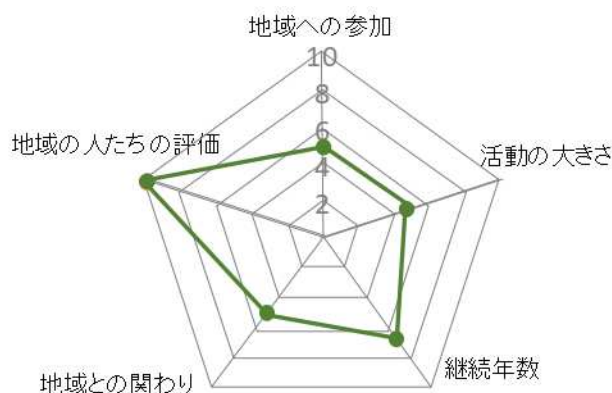
へ参加

②点火ボランティア活動だけでなく

協賛金集めにも取り組みました。

レーダーチャートによる分析(右図)

「柳本もてなしのまちづくり会」から高い評価をいただいています。



1. 第 22 回『山の辺のあかり 柳灯会』への参加

今年も、初秋の宵に黒塚古墳墳丘部、柳本公園で実施された“柳灯会”にグループとして参加しました。柳本もてなしのまちづくり会との協働は、13 年目になります。

①柳本もてなしのまちづくり会の“柳灯会準備作業”へ参加しました。

準備作業及び協賛金集め等の打合せ 8 月 20 日 3 名

②初秋の宵あまたのあかりに浮かぶファンタジーの世界(9 月 13 日・14 日)へ参加しました。

第 22 回『山の辺のあかり 柳灯会』点火ボランティア活動

9 月 12 日(金)1 名、9 月 13 日(土)6 名、9 月 14 日(日)5 名

③点火ボランティア活動だけでなく、協賛金集めにも取り組みました。

村田学長、山添グループ、天理・山辺グループほか有志



黒塚古墳に行燈の設置完了



柳灯会 パンフレット



行燈の点灯が終わり一息のメンバー



協賛金 (村田学長、天理山辺 G、山添 G)

2. 2026 年度に向けて

奈良フェニックス大学地域研究科「天理・山辺グループ」は、「柳本もてなしのまちづくり会」の方々の地域活性化に向けての積年の熱い取り組みを支援できるよう、来年度も『山の辺のあかり柳灯会』の準備段階から参加・協力してまいります。

※本稿に関するお問合せ先: 高井靖之<y-takai@m4.kcn.ne.jp>

II 奈良のかくれた魅力を“おみやげ”で再発見する

奈良フェニックス大学地域研究科「奈良のおみやげ魅力開発グループ」
高井靖之 猪岡義昭 川原寿子 森本勝子 高岡宏芳 安田彰 銭谷宥司
荒木幸一 西堀博 栗田均 竹村寛子 副島明美 阪口文和 北條都

本プロジェクトの目標

- (1)「大和の新おみやげ開発(一閑張り)」の活動
本年度は、開発の基本コンセプトを守りつつ“一閑張り”の習熟度向上を図るとともに、銘々皿以外の作品(折敷など)についてもチャレンジ
- (2)奈良県北部を中心に栽培されている“大和茶”を学習
大和茶の学習会を実施し、山添村のお茶農家を訪問し、その魅力を見つけ出してきました。本年度は、大和茶を使ったスイーツや抹茶を提供している店を訪問し、その魅力を探ります。

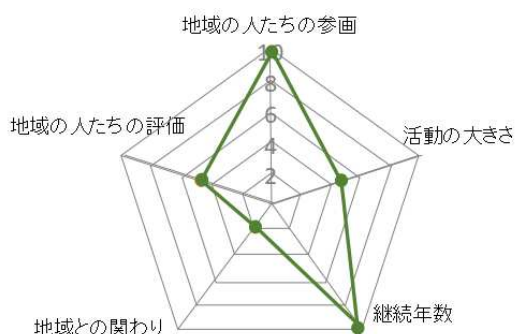
本プロジェクトの活動概要

- (1)“一閑張り”の商品開発と販売
- (2)奈良のおみやげ魅力開発

本プロジェクトの成果

- (1)“一閑張り”の商品開発と販売
 - ①折敷という新たなカテゴリーの作品の製作を着手することができました。
 - ②一閑張りの作品作りを始めて7年、製作する環境を整備する必要があります。
 - ③販売する場所を2箇所確保できました。
- (2)奈良のおみやげ魅力開発
 - ①世界的に抹茶加工品が伸びており、大和茶カフェの新たな取り組みを体感できました。
 - ②公開教養講座の講義とコラボし、奈良のおみやげと大和茶の魅力を実感できました。

レーダーチャートによる分析(右図)



1. 一閑張りの商品開発と販売

(1)一閑張りとは！

竹や木で作った籠などに和紙を貼って、柿渋を塗布し、強度と耐水性を備えた銘々皿などの日用品を言います。



竹籠(例)



和紙貼付(2回)



柿渋1回塗



柿渋3回塗

(2)“一閑張り”の商品開発と販売

- ①銘々皿・折敷を作成(1回/月の活動)。完成度をあげます(気泡の防止など)。
- ②河合町コミュニティカフェ“つどい”での小箱出店を継続し、作品を更新(5月21日)
- ③矢田寺あじさい祭に銘々皿を8個出品(6月、販売実績3個)

(3)“一閑張り”プロジェクトの活動状況



銘々皿の作成(奈良フェニックス大学事務所)



作品入れ替え(コミュニティーカフェ“つどい”)

2. 奈良のおみやげ魅力開発

(1)大和茶カフェ(茶楽茶(さらさ))で、抹茶パフェを体験

(2)奈良のおみやげ魅力開発

- ①大和茶カフェ(茶楽茶(さらさ))で、抹茶パフェを体験(9月25日5名参加)。
- ②抹茶と奈良のおみやげ(みもろ最中)の組合せを楽しみました(10/2 5名参加)。



大和茶カフェ(茶楽茶(さらさ))



大和茶パフェ



元興寺境内にて

3. 2026年度に向けて

奈良フェニックス大学地域研究科「奈良のおみやげ魅力開発グループ」は、来年度も地域の方々の参加・協力をいただき活動してまいります。

※本稿に関するお問合せ先: 高井靖之<y-takai@m4.kcn.ne.jp>

「防災・減災」啓発活動を通じた地域づくり

奈良フェニックス大学地域研究科「防災・減災グループ」
高岡宏芳 銭谷宥司 島田好彦 竹村寛子 高井靖之

本プロジェクトの目標―「防災・減災」啓発活動を通じた地域づくり

近年、山火事・大規模火災、北海道東方沖地震(プレートの移動)・九州沖縄地方地震(直下型、南海トラフ付近)等の災害が頻繁に発生し、日本列島を震撼させています。発災時に備え、ふだんから自助・共助を念頭に、防災に関する啓発活動に取り組み、地域の絆づくり活動を行い、12年目に入っています。

本プロジェクトの活動概要

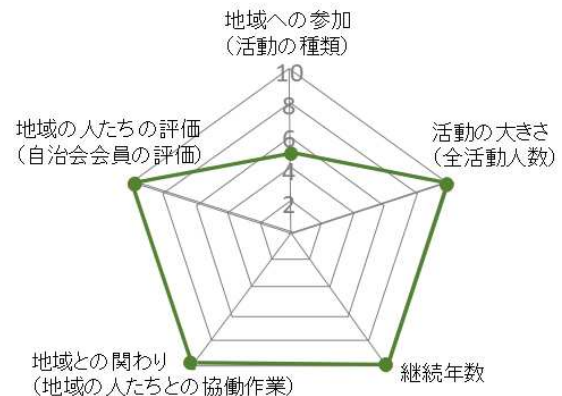
- ①2009年に、地域の「自主防災会」を設立し、結成16周年です。1回/年程度の訓練を実施しており、自治会会員の参加率は44%です。今後、非自治会会員の参加率を上げます。
- ②2011年には、自主防犯会(子ども見守り隊)を結成、防犯見守り活動を実施。近隣小学校(河合第3小学校)において防犯・防災学習会を実施しました。
- ③2023年は、河合町総代・自治会長会で自主防災組織を立上げ、また、地元の防災士有資格者による防災士ネットワークを立上げ、訓練・スキルアップ等に貢献しています。

本プロジェクトの成果

ー受講生・地元自治会組織との協働

- ①奈良フェニックス大学受講生を対象に救命体験講習会を実施(2025年12月)
- ②地域防災訓練に積極的に参加(天理市柳本校区総合防災訓練/2025年1月)

レーダーチャートによる分析(右図)



1. 第15回自治会主催「防災訓練」



防災訓練開式



防災訓練(オリエンテーション)



防災訓練(炊き出し訓練)

2. 防災施設見学(堺市総合防災センター)



防災施設見学(堺市)

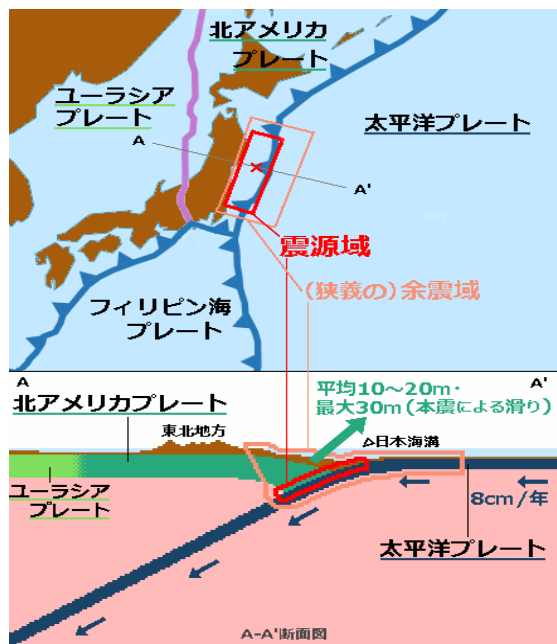


防災施設見学(堺市)



感震ブレイカー

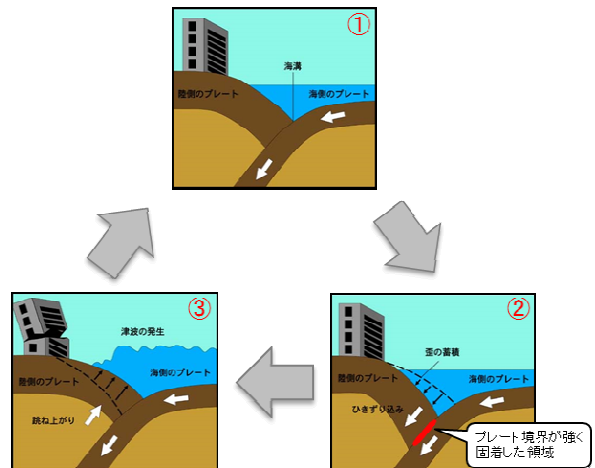
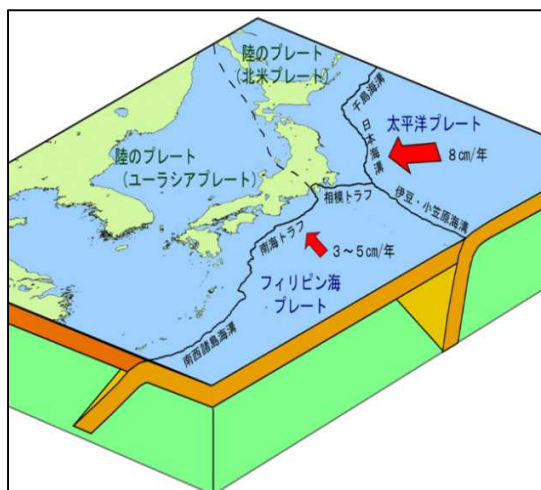
3. 最近の地震情報



(1) 北海道・東方沖地震

- ① 上と下の両プレートのより固い岩盤同士のぶつかりあいで大地震が発生
- ② 上と下の両プレート内の不均質構造が地震発生をコントロールした。
- ③ 震源断層の上も下も周りに比べてより固い岩盤でできており、上と下の固い岩盤同士のぶつかりあいで大地震が発生した。

(2) 南海トラフ地震



南海トラフ沿いのプレート境界では、

- ① 海側のプレート(フィリピン海プレート)が、陸側のプレート(ユーラシアプレート)の下に毎年数 cm の速度で沈み込んでいます。
 - ② その際、プレートの境界が強く固着して、陸側のプレートが地下に引きずり込まれ、歪が蓄積されます。
 - ③ 陸側のプレートが引きずり込みに耐えられなくなり、限界に達して跳ね上がることで発生する地震が「南海トラフ地震」です。
- ①→②→③の状態が繰り返されるため、南海トラフ地震は繰り返し発生します。

4. 2026 年度に向けて

奈良フェニックス大学地域研究科における「防災・減災グループ」は、「地域づくり活動団体へのPR」を行いつつ活動します。防災・減災啓発活動への積年の思いが叶った地域として「天理市柳本校区」があり、来年度も準備段階から参加・協力し、取り組みを支援してまいります。

※本稿に関するお問合せ先: 高岡宏芳<takaoka@m5.kcn.ne.jp>

高齢者支援活動のネットワークづくり

奈良フェニックス大学地域研究科「高齢者支援グループ」

近藤登 竹下米子 高岡宏芳 竹村寛子 石丸十五子

飯田彰孝 副島明美 佐々木恵美子 米田千代子

中井政友 栗田均 白畑正江 加納美幸

本プロジェクトの目標

- ①高齢者の楽しい生活を維持する。②近隣の市町村とのネットワークづくり

本プロジェクトの活動概要

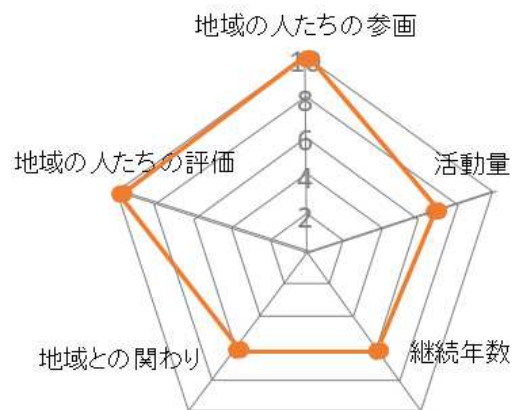
支援活動の継続実施と近隣市町村との活動ネットワークの拡充

本プロジェクトの成果

初年度は活動時間 54.5 時間、延べ利用者数 13 名であったが、本年度は活動時間 1,850 時間(約 34 倍)、延べ利用者数 1,650 名(約 126 倍)に急増した。

レーダーチャートによる分析 (右図)

- ①地域の人たちの参画:地域に密着した活動を展開。会員はすべて地域住民
②活動量:活動のピークは 2035 年前後、そのための 60 歳代～75 歳代の活動者の増員
③継続年数:活動 8 年目。活動のピークに向けた組織の増強
④地域とのかかわり:本会にとっての若手の増強と近隣市町村とのネットワークの構築に苦戦
⑤地域の人たちの評価:価格設定への不満は聞かない。ケアマネージャーからの依頼も多い。



1. 活動のこれまでとこれから

奈良フェニックス大学教養学部での三和清明先生(NPO 法人寝屋川あいの会理事長)の「シルバーパワーで助け合いー高齢者の生活支援ビジネス」の講義をきっかけに集まった 10 名ほどで立ち上げた“ささえあい広場「こころ」”(以下本会)が、大和郡山市で活動を始め 8 年が過ぎようとしています。会員の皆様に支えられ、おかげさまで活動も予想を超えて広がってきました。

初年度の活動実績は 54.5 時間で始まりましたが、8 年目の活動は年間 1,800 時間を超える勢いとなってきました。30 倍を超える急成長です。

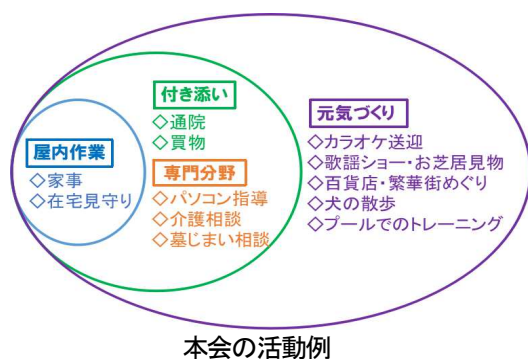
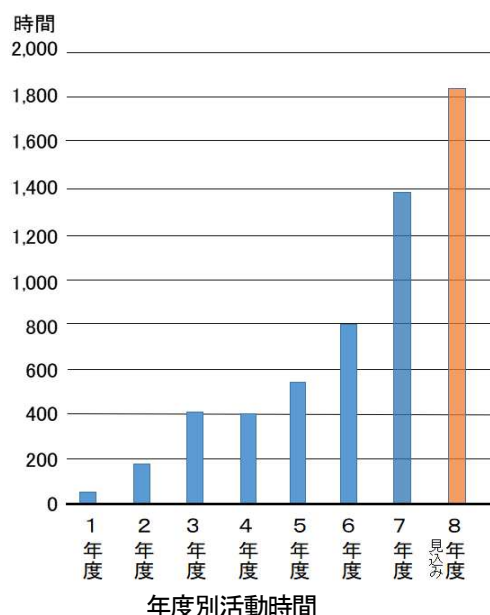
ここまでくると、課題も見えてきました。1)ボランティア意識だけの運営には限界があります。2)組織の改革や体質強化が必須です。3)利用希望の増大は大和郡山市域だけではなくこの町も共通なはずです。奈良市を始め多くの方々に参加いただき、皆さんのお住いの町にも活動の輪を広げていただくことが不可欠です。

多くの仲間がそれぞれの町で活動を始め、高齢者仲間のネットワークが構築されれば、基盤が強固になります。そして高齢者の仲間が集い、その中で徐々に世代が交替(活動者⇒利用者)していけば、始めて活動の盤石な組織基盤が確立されます。

2. どんなことをどれくらいやってきたの？

(1) どのくらいの活動実績があるの？

新型コロナウイルス感染症が蔓延した時期に、活動の停滞がありましたが、今年度は1,850時間の達成が見込まれます。



特に3年前から正式に活動を開始した、「移送活動」(車による送迎など／事故の補償保険に加入)を希望される方が目立っています。この移送活動については、近年になって、ボランティア活動は営業許可を必要としない旨の通達が出され、安心して活動ができることとなりました。

買い物や通院には移動がつきものですが、高齢者にとっては移動が大変です。大和郡山市では、通院などに利用できるバス路線も少なく、車に頼らざるを得ないのが実情です。しかし、事故への不安はぬぐい切れません。安全運転に努めるとともに、本会としても独自の保険に加入するなどの対策も進めております。

< 延べ利用人数で見た活動の経過 >

初年度の活動は54.5時間で、利用いただいた延べ人数は13名でした。これに対し、本年度の実績見通しは、1,850時間(約34倍)、利用延べ人数は1,650名(約126倍)となる見込みです。利用人数の増加率が高いのは、継続的な利用が増え、会員一人当たりの利用回数が大幅に伸びたことによると思われます。多くの方に利用いただいているのだと、改めて実感しております。

(2) どんな活動なの？

本会の活動は「介護予防活動」と言われています。簡単に言うと、介護制度の利用者と比べ、元気な高齢者(生活者)が支援対象となる活動です。いろいろなことに興味がわき、いろいろなことに取り組む元気な高齢者を対象とするため、「ご本人の希望を尊重する」ことを大切にして活動を進めてきました。介護制度は、「命を守る活動」といっても過言ではありません。一方、私たちの活動は、高齢者の「楽しい生活を維持する」ための活動なのです。

このため、利用される方の希望の実



通院支援



フジ棚の撤去を依頼され、フジでリースを作って差し上げました。『長年丹精込めたフジ、よい思い出になりました』との感謝の言葉をいただきました。

現を尊重し運営していますが、技能や技術がないことまでは引き受けられません。庭木の剪定はお断りしますが、『枝を切るぐらいはできます』と申し添えております。中には『枝を切っていただければ十分です』と言われる方もおられます。

「元気づくり」なるジャンルまであります。本会のオリジナルな活動名称です。楽しくなりませんか！介護制度では対象外の、カラオケや鍼灸院への送迎、犬の散歩などがあります。最近では墓じまいの話題まで出始めました。一緒に買物に行く予定でも、体調が悪い時などにはその日の朝に買物代行に変更するなどの対応ができるのも本会の特長です。

なお、本会の活動は、活動1時間当たり1,000円(うち200円が運営費)＋交通費(片道)をいただく有償ボランティア活動です。利用者も活動者も、全員が本会の会員として登録している会員制組織です。当初は有償ボランティアという言葉を理解いただけるのか？心配しましたが、大きな問題もなく受け入れていただいたように感じています。

(3)利用が増えた理由は？

宣伝をしていますが、なぜ利用者が増えるのか？その社会的な背景には、「子育て世帯」と「ジジババ世帯」が分離して生活する今の社会実態があります。そして、「ジジババ世帯」の孤立化も目立ちます。利用が増えた理由は、利用したい方が多いことです。こう考えると、ベビーブーマー世代が80歳を迎えたあとも需要はさらに増加していきます。

(4)私たちの活動の良いところ！

私たちは、70歳代の活動者が80歳代の利用者を支援しています。介護制度では、30歳代前後の世代が80歳代をお世話します。私たちなら島倉千代子と言われても反応できます。世代が近いことがコミュニケーションの近道であり、意思疎通が求められる「介護予防」には、「高齢者が高齢者を支援する」ことがベストなのです。

(5)活動してわかったことは？

私たちも最初は、「事務所が必要、法人格をとり、固定電話もFAXも」と考えました。しかし、ミーティングは、社会福祉協議会の無料会議室で十分です。事務所を借りなければ、余分な経費はかからず、活動者の保険と電話代だけで済みます。高齢者支援事業は、赤字の心配が不要な、安心して起業できる事業なのです。

スマートフォンの活用は、これからは不可欠になっていきそうです。Lineで依頼を受ければ、活動内容・日時がいつでも相互に確認できます。電話で聞いたメモをなくす危険を考えれば、どちらが便利か一目瞭然です。

活動者の技能も、昭和の時代に“3世帯家族内でやっていたレベルの支援”と考えれば、誰にでもできる活動なのです。

3. これから

活動実績は、全体的には右肩上がりの傾向が顕著です。ロコミで「イイヨ」が伝播したようです。

前段でジジババ世帯の分離について述べましたが、もう一つ大きな増加要因は、介護認定を受けていない高齢者(行政の目から見た健康な高齢者)の中に、わずかな支障を抱え前向きな行動に躊躇する方が予想以上に多いからです。バスのステップが高い、出かけると他人に迷惑をかける……。高齢者は、出歩かないと足が弱るのです。それなら、躊躇している間に支援の声をかける、それしかありません。それが、ボランティアの唯一無二の役割ではないでしょうか！

介護制度が大変な時期を迎えようとしています。ベビーブーマー世代が80歳を迎えようとしています。要介護者が激増する中で、介護の受け皿は増えることはありません。介護制度は財政面

の問題から、支援対象者を増やす方向の制度改革は難しい状況にあります。介護事業者の側から見ても、20 年もたてば減少する介護需要が見えているだけに、これから施設の増強に取り組むことは望み薄です。要介護者が大幅に増える中で、介護制度を利用できる人は増えません。大和郡山市の社会福祉協議会が主体となった、矢田山町や城町の移送サービスが始まっています。しかし、こうした特定の分野の支援政策は、今後、行政の事業として拡大する余地はありますが、本会のような個別対応型の『元気な高齢者支援』には難しそうです。

おひとりで生活されている方の中には、“一人で掃除するのはイヤ”だと訴えられる方もあり、活動者と二人ならおしゃべりしながら楽しく掃除に励まれる方もあります。こうした個別の状況への対応は、ボランティアならではの支援なのです。私たちのような高齢者の互助活動の需要は減りそうもありません。その観点から言えば、この事業を安定的に継続させることが近未来に向けた大きな課題です。

高齢者だけで行う事業は、高齢者ならではの脆弱性があります。特に最近では、企業の再雇用制度の定着に伴い、本会のような事業に参画できるのは概ね 70 歳となり、80 歳を活動の退け時とすれば、実働は 10 年しかありません。高齢であることはそれだけでもリスクであり、継続的な事業運営は、それを見越して進める必要があります。本会は利用者も活動者も全員が会員制であることは前述しましたが、若い活動者層が増加し、高齢となった会員が利用者に転換していくことが、組織の永続性につながると考えています。その意味では 60 歳代後半から 70 歳代前半の会員増強がカギになると考えています。

4. 皆さんの力をお貸ください♥

多くの方々から私たちの活動に期待をかけていただく中で、私たちの活動も、事業として安定的に継続運営することが不可欠だと感じています。そうした中で、取り組むべき課題は、大きくは二つあります。その 1 番目は、活動の基盤づくりであり、大和郡山市域の事業の確立・強化です。特に不足気味な 60 歳代の活動者の増員や各種研修の充実に注力していきます。

2 番目の課題は、広い視野での仲間づくりによる、互助的な支援体制の構築です。奈良市や天理市など近隣の市町村に呼びかけ、支部的な組織をつくり“ささえあい広場”のネットワークを構築したいと考えています。規約や利用料などは統一するとともに、Net を活用した各種規定・会議録・活動実績、さらにはトラブル事例などを相互に閲覧できるシステムを導入します。3 ヶ月に 1 回程度の支部合同のミーティングを実施すれば、活動が同じだけに相互理解は進むものと思われる。こうしたネットワークができれば、トラブルが生じた支部を、他の支部が支援することが可能となり、より事業基盤が強化されることに繋がります。また、草むしりなど今となってはやり手の減ってしまった作業の担い手などを、支部間で融通すれば事業運営に貢献することにもなります。

大和郡山市以外で高齢者支援活動に関心を持たれた方、ぜひ手を挙げてください。私たちが得たノウハウはすべて開示し、全力で支援していきます。高齢者支援活動の仲間に入っていれば、近い将来には、仲間が増え、その仲間が私たちの老後を支援いただける良い循環ができていきます。高齢者支援活動は、自分自身の元気づくりそのものでもあります。少しのお小遣い稼ぎにもなり、ちょいと一杯の楽しみにもつながります。

大和郡山市内の方も、私たちの活動に手を挙げてください。私たちの住む町を、高齢者が「胸を張って生活できる町」にしませんか！ 皆さんの参加をお待ち致しております。

本稿に関するお問合せ先: 近藤登 <mb75ag37ml@kcn.jp>

矢田地区の発展に向けて

奈良フェニックス大学地域研究科「発展する矢田の会」

石丸十五子 荒木幸一 佐々木恵美子 多井司

近藤登 山内弘昭 中井政友 栗田均 猪岡義昭

松島勇治 加納美幸

本プロジェクトの目標

私たちが活動している矢田地区も、住民の高齢化等により、活力の低下が見られます。私たちは、住民の方々との交流を深めながら、矢田地区をさらに魅力的な地区にしようと活動しています。活動は、約 10 年が経過しました。

本プロジェクトの概要

- ①アジサイロードづくり
- ②ホタルの飼育と交流活動
- ③国際・文化交流
- ④参加型・体験型プログラムの提供
- ⑤アジサイカレントウの販売

本プロジェクトの成果

◇飼育したゲンジホタルの観賞会を矢田寺境内で毎年開催し、大和郡山市内外から参加いただいています。また、地区の子ども園とのホタル飼育の連携もできました。さらに、いろいろな所から見学・研修に来ていただけて、交流も深まっています。

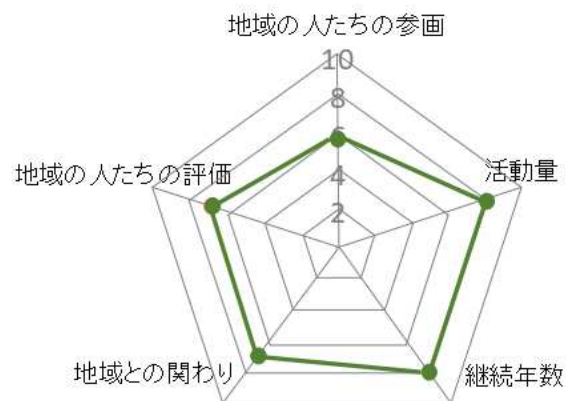
◇月に 1 回程度の「小さなコンサート」は、毎回 20～30 人が参加し、演奏者・参加者の間での交流が様々に広がっています。

◇田畑での有機農業作業、ハイキングなど参加型・体験型プログラムを提供しています。

◇矢田寺参道に活動拠点(矢田山荘)があり、ハイキングコース紹介をはじめ、様々な案内チラシ、ポスターなどを置き、広報に役立っています。

◇私たちの活動に対して住民の方々からいただける手助けも拡大してきています。そして、「活動に参加したい」との声が多く寄せられるなど、活動が着実に広がっています。

レーダーチャートによる分析(右図)



1. 活動の背景と目標

矢田地区は、大和郡山市中心部から約 5 km 離れた位置にあります。近隣には、アジサイが有名な矢田寺があり、自然豊かなこの地区へ自然散策やハイキングで訪れる方々も少なくありません。一方で、矢田地区も、住民の高齢化等により、活力の低下が見られます。

こうした状況下、私たちは住民の方々との交流を深めながら、矢田地区をさらに魅力的な地区

にしようと活動しています。矢田地区の発展に向けての私たちの活動は、約 10 年が経過しました。

私たちの活動に対して住民の方々からいただける手助けも拡大してきています。そして、「活動に参加したい」との声が多く寄せられるなど、活動が着実に広がっています。

2. アジサイロードづくり

最初の活動は、矢田寺へ続く坂道(参道)をアジサイロードにしようと思ったことから始まりました。まず、近所の植木屋さんに接ぎ木の方法などを習いました。そして、参道に置くアジサイを順次増やしていきました。

なお、矢田寺への参拝客は、年々、お年寄りが増え、家族は階段を登って矢田寺へ入れますが、階段を登れないお年寄りは、私たちの活動拠点:矢田山荘で、ホタルの水槽を見て説明を聞いたり、休んでおられます。ここは、常にエアコンが効いており、トイレは土足でも入れます。



矢田寺参道に
置かれたアジサイ



活動拠点:矢田山荘

3. ホタルの飼育と交流活動

各地で、ホタルが激減し、再生の取り組みが行われています。矢田地区には、かつて、たくさんのホタルが生息していました。

ホタルの飼育には 3 つの欠かせない条件があります。生活排水や農薬などを含まない流水、外気温が 26℃以下、餌になるカワニナが常にあることです。幸いにも、矢田地区では、矢田丘陵から流れ出てくる水が 1 年を通じて絶えることがなく、木々の重なりで夏場も比較的涼しく、カワニナの生息に適しています。



ゲンジボタルとカワニナの水槽



ゲンジボタルの幼虫



羽化したゲンジボタル

しかしながら、カワニナは、昨今の気象状況の変化のせいか、採取できる場所が減っています。カワニナは、3～4 月が自然に増える時期のようです。

私たちのホタルの飼育は、ほぼ 8 年となり、順調ですが、昨夏の暑さで、数が減った水槽(水槽は全 5 個)もあります。飼育方法を様々に試行しているのですが、まだ定まった方法には達していません。ほぼ毎日 4, 5 人で、作業・観察を行っています。今後は、遺伝の問題にも対応していく必要がありそうです。

一昨年に続いて、昨年も6月、矢田寺境内で、矢田山荘で飼育されたゲンジホタルの観賞会を開催しました。矢田寺でのホタル鑑賞会には、大和郡山市内外から参加いただいています。



矢田寺境内でのホタル鑑賞会



子どもたちとホタル観賞

昨年は、お寺の協力を得て、そうめん流し、屋台なども出て、日頃は走り回る機会が少ない子どもたちが元気に走り回り、子どもたち・家族との交流もできました。

また、地区の子ども園とのホタル飼育の連携もできました。さらに、いろいろな所から見学・研修に来ていただけ、交流も深まっています。

矢田地区にホタルが自然発生する場所をつくるという夢をもって活動することで、住み続けられるまちづくりにも寄与していると考えています。

4. 国際・文化交流

国際・文化(音楽)交流は、これまでの「小さなコンサート」を月1～2回に広げ、いろいろな楽器の演奏、歌など、プロのミュージシャンも参加して楽しむ

ようにしています。例えば、生バンドなどの演奏も加わり、音楽の説明、プレイヤーの個人的な裏話などを混じえて、ホールでのコンサートとは一味違った方法で楽しんでいます。参加者は20～30人で、親しく話せ、クラシックファンを増やすのにも効果的です。参加者が何らかの形で演奏に加わることもできます。



小さなコンサートの様子

一方、これまでに矢田山荘、大和郡山市、奈良を訪れた人を中心に、世界の20あまりの国・地域から奈良に関する気持ち・インフォメーションなどを送ってもらっています。また、オンラインで奈良市の英会話グループと海外との生のニュースなどの交流も行っています。奈良フェニックス大学のかつてのシンポジウムにゲスト出演くださった女性も、定期的に参加しています。

筆者も、近鉄奈良駅の案内所のボランティア活動が55年になろうとしており、インバウンドの訪問者の変遷などを話したり、様々に「人と人との小さなつながり」ができていると思います。なお、今年度、宇治市の万福寺での国際交流イベントに奈良フェニックス大学の有志数人と一緒に参加してきました。天候にも恵まれ、良い交流がもてました。

5. 参加型・体験型プログラムの提供

田畑での作業、ハイキングなど、宿泊を含め参加型・体験型プログラムを提供しています。田畑



昨年9月5日、奈良女子大学理学部の遊佐教授と研究室メンバーが、矢田山荘のホタル飼育を見に来られました。今後、ホタル保全の取り組みを行っている佐保川地域とも連携することができればうれしいですね。



での作業は、天理市や大和郡山市で有機農業に取り組んでおられるグループと定期的に交流・作業を行っています。将来のことを真剣に考えておられる人たちに力強さを感じます。

6. アジサイカリントウの販売

元々、タイの有名な寺院でおみやげとして売られていた蓮の形の菓子を、私たちはアジサイの形にして販売しています。病氣平癒の目的でタイの女性がお供えとして持ってこられたもので、もう7～8年になりますが、着実にファンを増やし、確実に売れています。昨年は、8月に1,500袋ほどが売れ、今年度は2,000袋ほどの販売になりそうです。収益は、活動資金に充てています。

7. 今後の活動に向けて

今年度は、子どもたちとの交流の機会が倍近くになりました。また、地区の方々との関わりも広がっていると実感しています。今後は、子どもたちとの交流、地区の方々との交流の機会をさらに増やす活動を行っていきたいと考えています。

※本稿に関するお問合せ先:

石丸十五子<k.shikichan.aichan.1946@gmail.com>,<yatasansou@outlook.jp>

故郷を未来に残すプロジェクト－山添村の活性化－

奈良フェニックス大学地域研究科「山添グループ」

阪口文和 辻内幸二 山本裕三 北條都 飯田彰孝 副島明美

西堀博 森本勝子 安田彰 酒井則子 猪岡義昭 山内弘昭

本プロジェクトの目標

山添村は奈良県北東の端にあり過疎化が進む村です。私たち山添グループは、この村が元気になるためになんらかの貢献ができないかと、奈良フェニックス大学内でグループを結成しました。縁あって広瀬地区にある『ブックカフェひろせ』を起点に活動を始め、今年で7年目を迎えています。

これまでの6年間の活動を通じ、地域内外の人々が活発に交流することで、地域再生の契機になり得るとの認識をもちました。山添村の静かな環境と『ブックカフェひろせ』の温かさは、都市に住む人々にとっても大きな癒しであり価値のあるものです。「交流」を通じて村に新しい風が吹き続け、活気のある地域再生につなげることを思い活動を進めていきます。

本プロジェクトの活動概要

(1) イベント参加と社会貢献

① 鯛焼き販売によるチャリティ: 鯛焼き 350 個の予定販売数をすべて完売。その収益金の一部は地域の福祉活動支援として、山添村社会福祉協議会へ寄付いたしました。

② 竹細工教室: 地域内外の交流、文化活動への貢献を目標に教室へ参加。滋賀県「かわらミュージアム」および山添村{文化祭}の2会場にて展示協力を行いました。

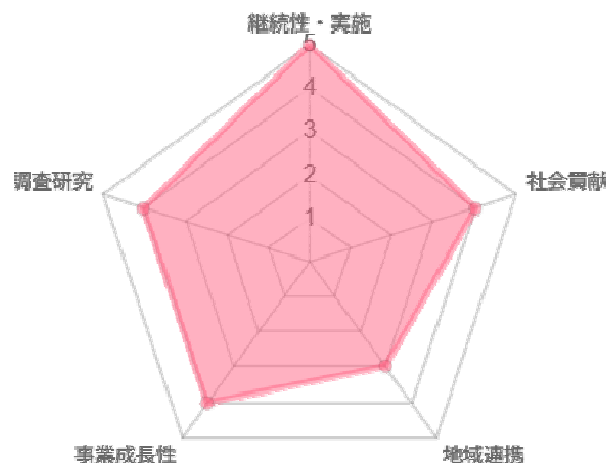
(2) そばプロジェクトの推進

実証店舗の運営: 3年目の本年度は、初めて計8回の実証店舗の開設を行いました。開設毎に50～60人の安定した来客もあり、検討会議への積極的参画を通じて事業化に向けた進展が一定果たされました。

(3) 文化財プロジェクト

保全と活用に向けた土台づくり: 文化財の保全および地域活用案の策定については継続課題ではあるものの、事例調査活動を積極的に進めました。地元村会議員との意見交換会や行政、観光協会との研究会を実施し行政・地域連携の強化を図りました。

レーダーチャートによる分析(右図)



注)レーダーチャートによる分析(プロジェクト活動評価)の内容

① 継続性・実績: 花祭りへは4年連続で参加、鯛焼き模擬店で300～350匹を完売。本番前にプレ出店と試食会を行い、特別養護老人ホーム「せせらぎ苑」へ鯛焼きを届ける慰問活動を実施。収益金を村社会福祉協議会へ寄付し、地域福祉の向上に寄与。活動の信頼性と評価を獲得。竹工房教室へは、開校時より継続して参加。そばプロジェクトは、立上げ時より参画、本年度は実証店舗の開設に貢献

② 社会貢献: 鯛焼き収益金を村社会福祉協議会へ寄付。文化財保護意識の向上に努力

③ 地域連携: 村内他地区視察。忍坂地区から講師招聘。竹灯籠の他県展示。山添村文化祭に加え、比叡山延暦寺や近江八幡市立かわらミュージアム(国スポ・障スポ滋賀2025関連企画)など村外へも積極的に出展

- ④事業成長性:「やまぞえそば」のブランド化推進。地産地消へのこだわりを通じた事業方針の明確化により村民等からの共感を得ました。
- ⑤調査・研究(文化財の保全と活用に向けた土台づくり):文化財の保全および活用案の策定については継続課題であるものの、事例調査を鋭意進めました。また、山添村議会議員との懇談会を実施し、行政・地域連携の強化を図りました。

1. イベント参加と社会貢献

(1)花祭りでの鯛焼き模擬店を通じた社会貢献

- ①継続性:「ブックカフェひろせ」で開催される花祭りに4年連続で出店。フェニックス大学に対する認知度の向上につながるとともに、交流活動の増進が果たされ、地域の活性化に一定の貢献が果たすことができました。
- ②地域交流:本番前にプレ出店と試食会を行い、特別養護老人ホーム「せせらぎ苑」へ鯛焼きを届ける慰問活動を行いました。
- ③福祉支援:収益金を山添村社会福祉協議会へ寄付し、地域福祉の向上に寄与、活動の信頼性と評価を得ています。



花祭り模擬店鯛焼き



社会福祉協議会へ寄付

(2)竹細工教室を通じた文化振興と交流

- ①普及活動:発足時からの参画に加え、広瀬地区内外の方々と交流活動を通じて文化振興と活性化に一定の役割を果たせました。
- ②広域展示:山添村文化祭のみならず、比叡山延暦寺や近江八幡市立かわらミュージアム(国スポ・障スポ滋賀2025関連企画)など、村外へも積極的に出展。尊顔団体、住民との交流に貢献ができました。



かわらミュージアム

2. そばプロジェクト

①一人の「独り言」が村を動かす

地産地消にこだわった『やまぞえそば会』の挑戦が着実に進み、多くの村民の共感を得た意義は大きいと思われます。そばプロジェクトは、地元で趣味として始め、「そば道場」で学んだ森さんの『そばで地域活性化ができないか』という一言から始まりました。その思いは観光協会の福田さん、そして奈良フェニックス大学教養学部6期生の上浦さんへと伝わり、山添グループの協力へと繋がりました。2023年度の準備期間を経て2024度には「やまぞえそば会」が正式に発足。まさに地域の人と人の絆が生んだプロジェクトであり、地域づくりへの問題提起とあわせて、新たな交流の場の創出を果たすことができました。



そば御膳

②『山添産』の完全地産地消

- ◇実証店舗を昨年4月より、月1回ペースで開設
- ◇地元の恵みを凝縮した『そば御前』を提供
- ◇開店は毎回11:00から13:30の短時間ながら、村民や観光客を中心に50～60食を完売。「本当においしい」との声を多数いただく人気スポットになっています。

③技術の研鑽

より高い品質を目指し、メンバーは『「そば道場」への参加や石臼挽きの指導を受けるなど、技術向上に向けた取り組みも進めています。今後は、新たな交流の場を創出する観点から、体験プログラムの提供やそば関連商品の開拓など、山添村の食の魅力を総合的に発信する拠点を目指すこととしています。

3. 文化財プロジェクト

私たちが活動の拠点としている広瀬地区には、重要文化財「快慶作の阿弥陀如来像」が地域で守られています。この阿弥陀如来像をテーマにした地域の方との懇談会で、「この阿弥陀さんが地元で維持管理できなくなったら、比叡山へ持っていかれる」との切実な言葉がありました。単なる物理的な移動への不安ではなく、地域のアイデンティティや心の拠り所を失うことへの危機感の現れであると確信し、わがグループの研究・検討の方向性を、「地域の資源を地域内外の人にいかに支えてもらうか」としました。



西方寺の阿弥陀如来像

1)「所有」から「共有」への仕組みの研究・検討

2)文化財を核とした「交流の創出」

「ただ見学する」状態から、人が集まる「装置」として活用することで、保全のための資金と人手を呼び込める仕組みの研究・検討などを、いっそう進めることとしました。

＜これまでの調査研究の要旨＞

過疎高齢化が進むなか、地域の文化財には、保存・継承だけでなく、損傷や盗難の問題が発生しており、地域の文化財保存・保全は緊急の課題であります。

そういったなかで、まず事例調査から始めました。調査目的は、文化財保存・保全の現状と活用のあり方を知るためです。なお事例調査の対象は、地域住民が守っている文化財とし、山添村を含め奈良県下としました。



事例調査地点

① 山添村

広瀬地区「西方寺」、室津地区「薬音寺」、葛尾地区「観音寺」、松尾地区

②奈良県下

大和郡山市丹後庄町「千體寺」(未調査)、桜井市忍阪区「石位寺」、宇陀市室生三本松「安産寺」、磯城郡川西町「旧白米寺」、磯城郡田原本町宮古区

事例調査からのまとめは、文化財を活用して地域の活性化に貢献していると思われる活動や手法を列挙しました。

＜事例調査からの纏め＞

- 1)地域の歴史文化に対し強い想いのリーダーとそれを支えるメンバーがいる。
- 2)自治会内に文化財活用チームなど明確な組織をつくっているところは活動が安定している。
- 3)文化財を含めた地区の財産を守るために、支援団体として公の認可をとり将来の管理の引継ぎ時の問題に対応している。

4)県や市観光協会などの公的資金をうまく活用し、公の認知を得ていると活動が安定している。

5)講演会などで著名人をゲストにしているところ、イベントが豊富なところは地域外の参加者が多い。

6)地域で作っている文化財の情報作り(DVD や冊子)やイベント発信(ポスター)は手作りだと内容に親近感がある。

7)清掃美化活動を定期的に行い、地域がきれいなところはウエルカム感がある。

8)文化財活用の活動原点を、地域住民が地域の文化・歴史を知ってもらうことで始めたところは、結果として地元の啓発とともに地元の応援と活動の継続につながっている。

なお事例調査のほかに、昨年度は山添村役場担当職員との懇談会、また今年度では村会議員との懇談会をもつことができ、どちらも文化財保全について議論させていただきました。その際には懇談会継続の提案もいただきました。

事例調査でなるほどと思ったのは、まとめ 8)の内容です。すなわち、地域の文化財を、まず地元の人に知ってもらうことでした。地域の文化財を地域住民が再確認することによって、地域の誇り、地域の愛着、さらにはコミュニティの強化にもつながるのではと思われました。しかし仏像は、地域にとっては信仰の対象であり、観光の対象とすることに抵抗があることも確かです、そのことを理解しながら今後も検討を続けていく所存です。



桜井市忍坂区「石位寺」の調査



山添村村会議員との懇談会

※本稿に関するお問合せ先: 阪口文和<saka.fumi.2163@gmail.com>

黒滝村と共に ―魅力の発見と発信―

奈良フェニックス大学地域研究科「黒滝村グループ」

山内弘昭 多井司 竹村寛子 石丸五十子 辻内幸二 山本裕三 阪口文和

北條都 酒井則子 西堀博 竹下米子 森本勝子 栗田均 猪岡義昭 綿田彰

本プロジェクトの目標

黒滝村の村民の方々との出会い、自然、日本遺産の構成文化財、特産品、伝統工芸品を知り、その魅力を外部に発信し、少しでも多くの人に村を訪れてもらう。

本プロジェクトの活動概要

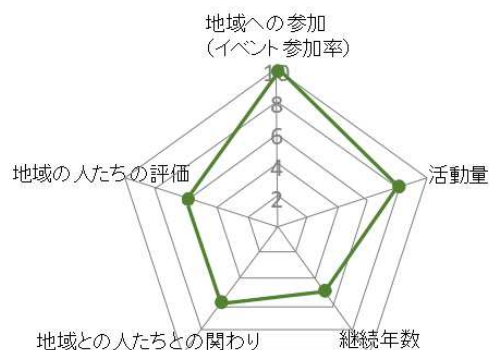
- ①黒滝村への訪問を重ねる(黒滝村を知ること、私たちを知ってもらうこと)。
- ②特産品や伝統工芸品の生産者を訪問し、直接お話を伺って理解を深める。
- ③村内の名勝地や日本遺産の構成文化財を巡りその魅力や歴史を学ぶ。
- ④より村民の方々とお会いして少しでも早く私たちを知り理解してもらう。

本プロジェクトの成果

活動当初はなかなか認知いただけなかったのですが、最近は、村民の方から声をかけていただけるようになってきたことは、プロジェクトを継続してきた成果だと自負しています。

レーダーチャートによる分析 (右図)

- ◇地域への参加(イベント参加率): 鳳閣寺の清掃、夏祭り、交流会、秋祭り、フードドライブ計6回すべてに参加
- ◇活動量: 2回/月以上の現地活動
- ◇継続年数: 2020年スタートで5年間継続中
- ◇地域の人たちとの関わり: イベント参加や訪問時に、村民、森林組合、役場(村長、副村長)、村議会議員の方々とコミュニケーション
- ◇地域の人たちの評価: 村民の方々から認知をいただけるようになっている。



1. はじめに

奈良県の中央部に位置する黒滝村は、古くから「奈良のへそ」と呼ばれてきました。修験道や仏教信仰と深く結びついたこの地で、人々は自然への畏敬と感謝の中で暮らしを営んでこられております。また、日本を代表する銘木吉野杉の産地として伝統産業の林業が盛んな地域でもあります。こうした林業文化の根底には、自然と向き合い、急がず、無理せず次の世代へ繋ぐという姿勢があり、黒滝村の人々の穏やかで誠実な人柄にも表れています。

そして黒滝村には、理源大師廟塔、鳳閣寺、役場旧庁舎、高算堂など日本遺産の構成文化財が多くあり、大切に保存・保護されています。



理源大師廟塔



鳳閣寺



高算堂



役場旧庁舎

さらに黒滝村は、伝統工芸豊かな、自然に囲まれた環境で名勝地も多くある村であることから、興味をもち、5年前に「魅力の発見と発信」というプロジェクトを立ち上げて取り組んできました。

2. 目標と活動概要

本プロジェクトは、「黒滝村の村民の方々と出会い、自然、日本遺産の構成文化財、特産品、伝統工芸品を知り、その魅力を外部に発信し、少しでも多くの人に村を訪れてもらうこと」を目標として実施しています。

そのための活動として、次のことを行っています。

- ①黒滝村への訪問を重ねる(黒滝村を知ること、私たちを知ってもらうこと)。
- ②特産品や伝統工芸品の生産者を訪問し、直接お話を伺って理解を深める。
- ③村内の名勝地や日本遺産の構成文化財を巡りその魅力や歴史を学ぶ。
- ④より村民の方々とお会いして少しでも早く私たちを知り理解してもらう。

3. 今年度の活動

メンバーの体調不良により1年間の休止時期があったため、実質4年間の活動になりますが、この間毎月1〜2回は村を訪問し、行事に参加したり、多くの方々とお会いして親しく接していただきました。主な活動としては、次があります。

①鳳閣寺の清掃(6月、12月)

鳳閣寺の境内、約600mの参道及び理源大師廟塔の清掃



②花供入峰の手伝い(6月9日)

毎年、醍醐寺三宝院門跡主催で、修験者が大峰山に登り蓮華の花を供え、理源大師廟塔でお祈りの後、鳳閣寺で紫橙護摩修行

③河分神社夏祭り・秋祭り参加(6月、11月)

お稚児さんの舞を奉納されたのち餅まきが行われます。雅楽の生演奏と春日大社で教習を受けて舞う秋祭りでは、前日に餅撒き用の餅を丸める作業を手伝いました。千数百個余りの餅は、わずか十数分で撒き終わりました。



④村民の方々との交流会(10月31日)

黒滝村森林組合と奈良フェニックス大学「黒滝村グループ」の共催で、『あきちゃん』でBBQを行いました。今回が3回目です。今回は、森林組合の若い方の参加が少なく21名の参加となりましたが、スカイチームや村会議員の方々などと共に、肉や野菜、おにぎりを頬張りながら楽しく歓談することができました。



⑤ふれあい祭り・フードドライブ参加(11月7、8日)

銘木店の社長さんの呼びかけで「もったいないをありがとう」のスローガンのもとに始められた活動で、毎年実施され品物の種類・数ともに年々増えています。食料品はもちろん、家電、食器、衣類など幅広い品目が並び必要な方に提供されています。



6. これからの活動

活動当初はなかなか認知いただけなかったのですが、最近では、村民の方から声をかけていただけるようになってきたことは、プロジェクトを継続してきた成果だと自負しています。

まだ黒滝村の魅力を情報を発信できるレベルには達していませんが、かつては日本産業の根幹を支えた林業や世界遺産の大峰奥駈道があり、多くの日本遺産の構成文化財や伝統工芸など歴史が集積された地域だと改めて気づかされました。

来年度は、継続的に村の行事に参加すると共に、参画できる機会が得られるように、以下の活動を考えています。

- ①より多くの村民の方々との距離を縮められるよう積極的に接していきます。
- ②村の各所を見て回り村全体の良さを知ります。
- ③スカイチームの活躍を現地で知ります。
- ④イベント・体験ツアーへの参加を通じた体験を行います。
- ⑤鳳閣寺と理源大師に関する伝承を検証・整理します。

以上の活動を通じ、村の新たな魅力を発見し、発信できるようにしていきたいと考えています。

※本稿に関するお問合せ先: 多井司 <yamachan821@gmail.com>

地域 P&C 養成塾中間発表

I 地域プランナー&コーディネータ養成塾半ばにして

ー少子高齢化が PR 不足か！ 塾生の層を厚くしていくには！

地域 P&C 養成塾塾長 若林稔

2025 年 7 月 5 日、地域 P&C 養成塾(地域プランナー & コーディネータ養成塾) 第 18 期は、新たな塾生 2 名を迎えて開講しました。

<地域 P&C 養成塾第 18 期生> (氏名／居住地／入塾の目的)

谷口昌義／三郷町／商工会を退職、第 2 の人生で地域づくりを基礎から学び直したい。

金紅綺／城陽市／多様な意見をもつ人たちと交流を重ね問題解決に取り組みたい。

今期の入塾生は 2 名という少人数でのスタートで、関わってくださった講師や関係各位には、少人数であるにも関わらず人材養成にご協力をいただきましたことを、まずお礼を申し上げます。

講座は、今期も現地研修を多く計画し、今井町の灯火会体験を皮切りに、三郷町、斑鳩町、野迫川村、御所市、田原本町などで学ぶ機会を得ることができました。

少人数であるために仲間意識が希薄になるのを避けながら研修効果を上げるために、卒塾して様々な方面で活躍中の地域 P&C の先輩方にも呼びかけて、参加してもらい、先輩・後輩のつながりを濃くすることができました。

少子高齢化が顕著に見えてきた現地でも学ぶ機会を 16～18 期生まで広げることで、より多くの人に、各地の現状を学んでもらえたことは、ひとつの効果であったと思っています。

これからも引き続き、卒塾生が現地研修に参加できる幅を広げていくことで、地域 P&C の連帯意識を高めることも大切であり、実行に移していきます。

6 月 6 日に行われる卒塾発表は、わずか 2 人ですが、貴重な体験や方向性を報告してくれればうれしなと期待しています。



龍田古道景観保全プロジェクト(三郷町)



鏡作神社(田原本町)



立里荒神社(野迫川村)



斑鳩産業(株)(斑鳩町)での研修

II 地域への想いを新たにして歩み出す

地域 P&C 養成塾第 18 期生 谷口昌義

(1)今井町がくれた新たな思い

私は、三郷町で育ち、三郷町商工会で 40 年にわたり経営指導員として地域の事業者を支援し、また、地域振興に関わる様々な取り組みに携わり、難しさも面白さも感じてきました。日々、地域の声に耳を傾け、「地域が元気であること」の大切さを実感してきました。人手不足、空き家の増加、地域コミュニティの弱体化といった行政や支援団体だけでは解決できない課題がたくさんあり、これらは地域全体で向き合い、世代を超えて取り組む必要があるという課題意識をもっていました。

そんな折、若林塾長と出会い、氏の今井町並み保存への取り組みに触れる機会を得ました。

今井町は、中世の町並みを今に残す全国的にも貴重な地域です。しかし、それは単に古い町家があるということではなく、その背景には、住民が地域の価値を理解し、守りながら暮らしているという強い意志があります。



龍田大社



地産他消 今井町衆市に三郷町PR 出店



現地研修 御所市

私自身もこれまでの経験を活かしながら、新たな視点と気持ちで地域づくりに向き合えると強く感じて、卒塾しても地元への貢献もさることながら、地域 P&C 養成塾の支援者リストに加わり、仲間の増加にも寄与していこうと感じています。これからは、より多くの方々とつながりながら、地域がより良くなるための一助となれるよう、学び続けたいと思います。

それは、私にとって刺激となり、「地域づくりをもう一度、今までとは違った視点で見つめたい、他地域での地域づくりの取り組みを見てみたい」という思いが強くなりました。その思いから、定年退職を機に、私は、地域 P&C 養成塾に入塾しました。

(2) 地域 P&C 養成塾がくれた新たな思い

地域 P&C 養成塾で学ぶのは、単に机上の知識や技術だけではなく、現地研修を通して、地域の歴史文化、まちづくりの実例、行政や団体との連携構築方法など、多岐にわたります。

特に感じているのは、現地研修に赴き、地域づくりは、外からの支援や制度だけで進むものではなく、多様な立場の人が関わり、人と人がつながり、若い世代も含めて地域づくりに参加できる仕組みが必要だということです。「地域に住む人々の記憶、思いに沿うことが地域の価値」ということは、入塾して得た視点です。

(3) 次世代へのバトンをつなぐための新たな思い

この地域 P&C 養成塾の価値を、より多くの人に知ってほしいという思いに駆られました。自分の地域を改めて見つめ直し、仲間とつながり、行動するリーダーが一人でも多く育ってほしいという思いがより強くなってきたのです。地域 P&C 養成塾には、そのきっかけがたくさん詰まっています。

今般、地元三郷町にて現地研修があり、木谷町長自らご案内くださり、自分の町を研修の場に提供することで、町の関係者多数に名ガイド役として働いてもらえる機会をつくれました。



現地研修 三郷町
木谷町長にガイド役をしていただいた



阿伽陀屋における講義

III そこにあった当たりまえが地域の繋がりを変える

地域 P&C 養成塾第 18 期生 金 紅綺

(1) 「文化」と「伝統」の背景にある「当たりまえ」

私にとって、当たりまえは、生活の中にたくさんあります。最たるものは、自給自足と物々交換で

す。もの心がついた頃から、わが家では、畑や田んぼを耕し育てて食べる、わな猟で捕獲したシカ・イノシシを捌いて食べる、食べきれないものは他の人へお裾分けする、すると、何かが形となって返って来るのが当たりまえでした。

そんな生活の中で18歳を迎える頃には、当たりまえのように、わな猟免許を取得し、父と一緒に山へ入り、食料のひとつとしていただけてきました。わな猟生活は、私の中では当たりまえなこと、「すごい」ことではなく、自然体、自然と向き合った生活を送っているだけです。



平飼いが当たりまえの鶏

こうした生活は、昔から当たりまえにあったもので、「文化」や「伝統」と言われているものや、消滅しそうなものを守るための言葉ではなく「当たりまえに戻ってほしい」と思っています。

(2) 里山のあり方と人との繋がり

「当たりまえに戻ってほしい」ものの例として挙げられるのが現在の里山管理です。本来、里山とは、人里と近い距離で田畑や雑木林、ため池があり人間と自然が共生する場所で、人も野生動物も資源が採れるようにした場所です。人々の生活・営みがあり、自然の保全が可能となり、それにより「共生」できていたものが、現代、人口減少と生活様式の変化により里山に人々が住みつかず、管理されなくなりバランスが崩れ、生物多様性の危機に直面しています。



昨年から騒がれているクマ問題も、本来は、クマより小さなシカやイノシシが増え、アライグマ等の小動物が里山に降りてきている時点で対策がとられるべきですが、そのタイミングで何もせず、深い奥山に暮らすクマが里山へと生息域を広げてきてからでは、できることは限られてしまいます。

こうした里山の管理は、生活の中で親から子へと受け継がれたり、地域のコミュニティの中で自然と受け継がれ、バランスが保たれていたはずですが、現状は、本来の当たりまえがなくなってしまったからではないかと思います。



自然と向き合う当たりまえの生活

(3) 住民と地域の繋がり

地域 P&C 養成塾に参加したことにより、地域住民とその地域が抱える問題解決の難しさ、継続していく方法を見出すことの難しさを感じました。

ただ、そんな中でも、本来あったはずの当たりまえが人から人へと受け継がれていく集落・町づくりを目指していきたいと考えています。

そのためには、自分自身が当たりまえを強要することなく、同じ年齢の若い世代を巻き込んでいく必要があると感じています。人と人が接触する機会、お年寄りと子どもが気兼ねなく生活のひとつの流れとして集まれるコミュニティの必要性を感じながら、その関わり方、現実問題を、この地域 P&C 養成塾の場で向き合いながら、実りある時間を過ごしていきたいと思っています。

本稿に関するお問合せ先: 若林稔<syodou-yamakitiman@nifty.com>

トークセッション「青年と盛年 奈良を語る」

司会 高井靖之（奈良フェニックス大学地域研究科）

出演 岡崎しのぶ（黒滝村） 井久保詩子（山添村）

高岡宏芳 加納美幸（奈良フェニックス大学地域研究科）

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

フェニックスの翼（奈良フェニックス大学校歌）

作詞: 兼村美德 作曲: 村田純也

青春時代は思い出と 胸にしまっていたけれど	我らが住まう“まほろば”は、だれもが羨む歴史の都 ^ち
未来にはばたく不死鳥の翼をここで手に入れて	思い新たに見渡せば 出会いふれあい新発見
今まだ青春 ^{はる} と気がつけば	翼 ^{とき} 広げる時間を得て
まだまだ語る夢がある まだまだ学ぶこともある	まだまだやれることがあり まだまだ果たす役もある
仲間と出会い これからも 奈良の未来を描きたい	仲間と出会い これからも 奈良の未来をつくりたい
フェニックス大学 フェニックス大学 我らが翼	フェニックス大学 フェニックス大学 我らが翼

♩ = 126

1 せ いしゅんじだ い は お もい で と

9 む ね に し まっ て い た け れ ど み ら い に

14 は ば た く ふ し ち ょ う の つ ば さ を こ こ で

19 て に い れ て い ま ま だ は る と き が つ け ば

23 ま だ ま だ か た る ゆ め が あ る ま だ ま だ ま な お

27 こ と も あ る な か ま と で あ い こ れ か ら も

31 な ら の み ら い を え が き た い フェ ニ ッ ク ス だ い が く

35 フェ ニ ッ ク ス だ い が く わ れ ら が つ ば さ